羅針盤

大原　國章
Kuniaki Ohara
赤坂虎の門クリニック 皮膚科，Visual Dermatology 編集委員長

「眼瞼のアトラス」編集のねらい

本号は眼瞼の皮膚病アトラスです．本誌では以前に“皮膚科 and /or 眼科 目の周りの病気とその治療”（2013年2月号）が発行されていますが，そこでは眼科疾患との関連が主眼でした．今回は「眼瞼周囲の皮膚病」に限っています．

その意味では，部位別シリーズの一環であり，過去の外陰（2005年4月号），爪（2009年7月号，2017年6月号），耳（2013年8月号），nipple（2015年12月号），手（2018年11月号・12月号）に続くものです．部位別シリーズの企画は将来的な単行本化を目指して立案され，今後も継続の予定です．最終的な発刊の時期は未定ですが，座右の書にふさわしい内容に仕上げる心づもりで取り組んでいます．インターネットの発展に伴い活字離れ・書籍離れが進んでいますが，書籍形態としての疾患アトラス・図譜にはそれなりの使い方，価値があると考えています．

私（大原）が皮膚科医として駆け出しのころ，田辺シンテックスが発行していた分冊のシリーズ（編註：現在は絶版）が届くのを心待ちにしていた記憶があります．1冊ごとにベテランの方々がその得意領域を図解されていて，とても勉強になりました．それ以外の製薬メーカーからも，何種類もの図譜が製作され，その執筆を分担したことも思い出されます．もちろん，出版社からもいくつもの臨床アトラスが刊行され，それらを読みふけったものでした．

門前の小僧習わぬ経を読み，百聞は一見に如かず，これは皮膚科修行の真実で，多数の典型病変を目に焼き付けておくことの大事さを言い当てています．

皮膚科専門医試験の面接を担当したことがあります．ある受験者は，疾患の特徴，病理所見をすらすらと口では答えられたのですが，いざ病理写真を前にするとその所見がどれなのか，指し示すことができませんでした．字面だけを箇条書きのように暗記しているだけでは，実際の患者，病理標本を相手にしたときに対応できません．臨床アトラスで目にした，画像・写真が瞼に浮かぶようにしたいものです．

さて，本特集号では炎症，感染症，肉芽腫，腫瘍などできるだけ多数の疾患を取り上げましたが，残念ながら月刊雑誌という制約上，事前に用意した疾患，症例，図を断腸の思いで割愛せざるを得ませんでした※．それらについては，単行本化の際には復活させますので，どうぞお待ちください．

最後に，目に関する言い回しをいくつか．

目の上のたんこぶ，目は口ほどにものを言う，目から鼻に抜ける，目から耳に抜ける，目から鱗，目に浮かぶ，瞼の裏に焼きつく．

こうしてみると，目は多くて，瞼は少ないようです．

※**編註**：本アトラス特集では，眼瞼に生じた100を超える疾患の写真リストから，Visual Dermatology 編集委員会が選んだ上位44疾患について，「皮膚科医が最低限知っておくべき疾患」としてとりあげております．（編集部）